

社会的な
孤立につながる!?

“すき間の困りごと”が増えています

すき間とは、福祉的な制度やサービスのすき間です。そのため、市からの支援が届かず生きづらさとなり、社会的孤立を招く要因ともなります。

下記は「すき間の困りごと」のほんの一例です。この例に当てはまったら社会的孤立だというわけではなく、社会の変化によって、つながりの弱い人の課題が顕在化してきたということです。さらには、生きづらさを抱えている人は、支援を受ける側だけでなく、誰かを支える側にもなれますし、そのような「支え手」「受け手」という関係を超えて、つながることが何よりも大切です。

数年前から、
相談が増えています

ひきこもり

一般的に、学校、アルバイトや仕事といった外との交流を避け、6カ月以上にわたって家庭にとどまり続けている状態

ダブルケアラー

子育てと親の介護の時期が重なり、両方を並行して担っている者

不登校児童・生徒

一般的に、年度間に連続または断続して30日以上欠席した児童・生徒（病気や経済的な理由は除く）

ヤングケアラー

本来大人が担うと想定される家事や家族の世話などを日常的に行っている子ども

居場所のない若者

義務教育が終わると学校との接点なくなり、公的機関の支援においても18歳までが多いため、相談できる場所がなく孤立してしまう若者

ひとり親の孤立

就労や子育てに追われ、相談時間がとれないなど支援につながりにくく、ひとり親が孤立を深めてしまうこと

繰り返される犯罪や非行

罪を犯した人の中には、手助けや福祉的な支援があれば再犯には陥らず、社会参加をめざせる人が多くいる

身元保証・死後事務

家族や親族への連絡がつかず、支援が得られないために、入院ができなかったり、アパートが借りられないなどの問題が生じる。また、葬祭人や相続人が見つからないこともある

最近、相談が
増えています

多頭飼育崩壊

飼い主の生活状況の悪化に伴い、飼っているペットの状態も悪化し、さらには、周辺的生活環境にも悪影響を及ぼす

8050問題

高齢（80代）の親が、長年ひきこもっている子（50代）の生活を支えているが、近所付き合いもなく、社会的に孤立した状態にある世帯

人と人を

居場所を

“つなぐ”と“つくる”でみんながつながる

～ 誰一人取り残さない地域共生社会の実現をめざして～



高齢化の中で人口減少が進み、本人や世帯の抱える困りごとは多様化・複雑化しています。人口減少による担い手の不足や、血縁、地縁、社縁といったつながりが弱まっている現状により、社会的孤立（関係性の貧困）に陥る場合があります。

今月は、そうした課題から、今必要な地域に合った「新しいつながり」についてみんなで考えてみませんか？

地域共生社会って？

地域共生社会とは、制度や分野ごとに「サポートする側」「サポートされる側」という関係を超えて、地域住民や地域のさまざまな人や団体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしや生きがい、地域をみんなで作っていく社会です。

例えばこんなことかな…

- 困っていたら「助けて」と周りの人に伝えることができる
- 助けの求めを受け止める誰かがいる
- 一人の困りごとを解決に向けてみんなで考えられる



地域づくり・出会いのプラットフォームの視点

福祉サイドからのアプローチ

まちづくりサイドからのアプローチ



図：厚労省資料を一部改変

プラットフォーム づくりの

今後の地域課題に取り組んでいくために

アンケートにご協力ください

地域のそこかしこでさまざまな活動が生まれる土壌をつくるためには、地域住民の「〇〇したい!」という気持ちに寄り添い、その思いが実現するように応援することが大切です。

このアンケートでは、暮らしの中にある「地域の困りごと」への設問だけでなく、皆さんの「興味・関心」についてお聞きしています。

「地域の困りごと」と「興味・関心」をつなぐ

社会的孤立を防ぐには、一人ひとりが地域社会との関わり方を自らで選び、役割を見出せるよう多様な接点を用意していくことが大切です。それは、新たな出会い、気づきから始まる「地域づくり」のプラットフォームづくりです。プラットフォームは、行政が計画的に進められるものではなく、地域住民の創意や主体性を源として生まれる場所です。